未来への地図

建設未来フォーラム
代表　佐藤　士朗

自然災害と建設業 ⑧

前回の事例に書いたように、経験値はその人の持つ力を成長させる大きな糧となります。

「いつ起きるか分からない自然災害」
＝2012年の九州北部豪雨災害

災害自体は起きないことに越したことはないのですが、日本という国は災害大国といわれるように昔から多くの大災害に見舞われてきています。

そもそも災害は想定を越えたものであり、当事者の実際の混乱は言葉に表せられないものだと思います。

大分県竹田市では7月の九州北部豪雨災害で12日に竹田土木事務所自体が浸水し、職員が庁舎に入れない状況となりました。

大分県建設業協会竹田支部では、災害発生後2時間で対策本部を支部に設置し、まさに阿吽（あうん）の呼吸での発注者との連携が行われ、協定に基づいて協力業者と迅速な対応を行い地元の混乱を最小限に抑える動きをしたのです。

本庁でも特に砂防関係では現場が山奥にあり 道路や河川と比べて情報が遅くなってしまいます。

その上に土木事務所自体が被災してしまうと情報が入ってきません。

そこで空から情報をとるという方法を取り、民間の飛行機、防災ヘリを使っての情報収集を行ったそうです。

道路、河川を中心に調査を行い航空写真が夕方にはでき上がってきました。写真を見ながら怪しいところを抽出して次先にけがをしないように、二次災害が起きないように細心の注意を払いながらもプロという意識を持ち、淡々と対応を行っていったそうです。

この時の気持ちをある方が語ってくれました。

「想定された通りに被災が起き、ゾクゾクした！」

生活を守るためにまだまだ危険性を持った場所が残されています。

さらに高齢化が進み、山林の整備に手がかけられないようになり、山肌が弱くなってきていることも要因にあるのではないかという話もありました。

竹田支部の友岡支部長は、当たり前のことをしただけだと言っていますが、集中豪雨となる1カ月前に県と災害協定についての打ち合わせを行ったばかりで、地域を守るという前提の下に協会支部自らが中心となって対応してくれたことに住民として感謝しなければならないと思います。

災害時のタスクチーム
〝地域を守る〟ということ

々に指示を行い、職員、建設業者とタスクチームを組んで使命感の中で対応を行い、危険な場所を優

未来への地図

建設未来フォーラム
代表　佐藤　士朗

自然災害と建設業 ⑨

結局ギリギリの状況で発揮される力は理論でも決められたフローでもなく、受発注者がお互いに持つ信念と適切な判断力、そして信頼関係が集約された力にあるのではないかと思います。

自然災害は何もかもを奪う…。

その姿を見ることにより地域の人々も被災者という立場を乗り越えて共に復旧させるという姿が見られるようになってきたのです。

これはきれい事の三方良しではなく、地域には建設業と公共の力が必要であるという事実を住民が身を持って感じ、壁が打ち壊された瞬間

「作る」「造る」「創る」
どの「つくる」を行っていますか？

た結婚式も中止となり安否を心配するばかり。

当たり前に暮らしていた生活環境が破壊され、途方に暮れる地域住民の中を黙々とがれき処理や生活道の確保に動く建復旧を行う姿が見られるようになりました。

囲いにかこまれた見えない現場ではなく、地域そのものが現場となっているため、建設業者の仕事と役割が見えるようが芽生えてきたのです。

「俺たちはな、感謝の言葉を求めて地域の人たちに認められるために仕事をしているわけじゃない。ただ黙々と与えられた使命を果たすことが俺たちの仕事であり、それを結果として第三者が評価してくれればいいんだ」。

ある地場中堅建設業の社長の言葉が心に残っています。

「作る」「造る」「創る」皆さんの会社はどの「つくる」を行っていますか？

物作りと地域を守るという仕事を通して人と人とのつながりを創る、それが建設業の原点であり、公共工事に求められている評価基準の創意工夫に当たるのではないでしょうか。

そしてそれが差別化へとつながっていくのだと思います。

喜んでくれる人がいるからこその公共工事ではないか、ある発注者の言葉でした。

設業者、その中でいつの間にか被災者自らが少しずつ手伝うようになり、最終的には共に生活環境の

ではないかと思います。

目の前で民家が流され濁流に呆然とする姿、予定されていになり、そこで黙々と作業をする姿に被災者たちも前を向いていかなければならないという気持ち